

ダイバーシティ&インクルージョン鼎談

- ・滝沢市議会議員 **柳橋 好子** 氏 《工学部電子工学科 昭和44年度卒業・岩手大学電気電子情報科会 会長》
- ・株式会社マルハン **狩野 亮** 氏 《工学部福祉システム工学科 平成21年度卒業、冬季パラリンピック金メダリスト（バンクーバー・ソチ）》
- ・岩手大学副学長（ダイバーシティ・環境マネジメント担当） **海妻 径子**



岩手大学は第二の故郷

海妻：本日はダイバーシティ&インクルージョンに関する鼎談ということで、お二方にお越しいただきました。まずお一人目が柳橋好子さんです。本学工学部の電子工学科の1回生と伺いました。在学中、学科内で女性はお一人だったと伺いましたが、当時の状況についてお伺い出来ますか？

柳橋：電子工学科の同級生は50人くらいだったと思います。電子工学科として4年間は私一人でした。電気には1年の時の4年生に1人、私が4年の時に1年に1人いました。工学部全体としては同期の応用化学科に1人で、先輩が3人くらいいたような気がします。約1200人のうち女性は数名ですね。

自分自身、抵抗はありませんでしたが、周囲が珍しがっていたようです。他の学部から離れている工学部まで、わざわざ見に来た人もいたようです。そういった状況でしたが、自分はそんなに違和感なく過ごせました。おそらく、周りの人が守ってくれたんだと思っています。

他には、周囲の意識について、新憲法になって何十年も経ってるのに、まだまだ男女平等が根付いてない時代なんだと実感した思い出があります。同級生から、「お前が入学したから、女性が1人入学したから男性が1人落ちたんだ。それは国家の損失だ。」と言われたんです。言われたときは蹴飛ばしたいと思いましたが、相手にすることでもないので無視しました。ただ、周囲はそういう意識なんだと実感しました。他にも、他学科の人たちから、今で言うセクハラになるようなことを言われたり、「女がこんなところに居やがって。」と言われたりしたこともありましたが、でも、そうやってた人はきっと今頃、何も言えず奥さんの尻に敷かれてると思います。（一同、笑い）

また、「工場見学」という研修があったんですが、教員から「えっ、あなたも行くの？」と言われました。普段は普通に講義を受けていたのに、先生の中ではそういう意識だったんだ、ということがありました。もう忘れてしまいましたが、そういったことは結構あったんでしょうね。

海妻：卒業後、本学でお勤めいただいた経験もあると伺いました。

柳橋：父親の意向で、地元以外の就職先は認めてもらえない事情があったことから、地元放送局の技術職に就こうと思っていました。ところが、2年ほど求人募集がなく、その様子を見ていた先生方から「残って勉強しなさい」と声をかけていただき、研究室に残って教務員になりました。しかし、大学の中だけではなく、外の空気も吸いたいという思いから先生にお願いすると、当時の就職担当の先生が菓子折りを持って回ってくれて、就職先を見つけてくださいました。その後は、結婚するまでは会社勤めをしていました。

海妻：岩手県地域婦人団体協議会の事務局長をされていたと伺いましたが、こういった経緯で就任されたんですか？

柳橋：結婚して東京へ引っ越していましたが、私の父親の関係で夫と地元岩手に戻ってきました。そして地元で地域活動を始めたんですが、まずは女性だからということで、当時の婦人会活動に参加していました。そうしているうちに、県の婦人会がNPOを取るというタイミングで、事務局から声をかけられました。そこから始めて、結局、事務局長と常務理事までやっていました。岩手県婦人団体の常務理事でしたので、全国の様々な勉強会に参加させていただいて、国の体勢や、当時始まった男女共同参画についても勉強させていただきました。



海妻：こちらの「岩手の婦人」という冊子（岩手県が発行）にも記載があるんですが、「岩手県地域婦人団体協議会」は戦前からの歴史ある団体で、錚々たる方々が会長を歴任されています。例えば、昨年度、本学において鷹嘴テルさんとの二人展を行った阿部トシヨさんという岩手県で女性初の教育委員長になられた方や、今年度取り上げる予定の横田チエさんも会長を務めておりました。こういったタイミングで事務局に関わられたのですか？

柳橋：当時の婦人会は、会員が何万人といたもので、その会費で婦人会館を所有していました。ところが、経営が成り立たなくなったことから、売却することになりましたが、当時の規則では法人でないと、建物・土地を売ったお金が全額国庫に持っていかれてしまうということで、慌ててNPO法人を立ち上げたという状況でした。そういった大変な状況だからと、事務局に引っ張られたんです。

海妻：議員になられたのは、そういった経験の中から声をかけられたのですか？

柳橋：実は、この頃から議員の声はかかっていたんですけど、家庭の事情もありましたし、岩手県地域婦人団体協議会の仕事を一生懸命やりたいからとずっと断っていました。しかし、岩手県地域婦人団体協議会を辞め、その後に滝沢市の婦人会会長にも就任しましたが最初から決めていたとおり4年で辞め、父親も看取って、これからは自分のことが出来ると思った時にまた声がかかったんです。「何もなくなったんだから議員をやりなさい、断る理由がないだろう。」と。確かに断る理由はありませんでしたが、それでも頑なに拒否をしていたところ、大学の同期でもある夫から、「やっぱり女性議員が足りないからお前がやるしかないんだ。」と、説得されました。普段、例えば電気電子情報科会の会長というお話があった時には、「何もお前じゃなくたって先輩たちがたくさんいるから、やらなくてもいいんだ。」という人だったのに、珍しいこと言うな、と。それで決心して、70歳にして議員になりました。私自身、びっくりですよ。

海妻：ありがとうございました。続いて、狩野さんのお話もお伺いしたいのですが、北海道網走市のご出身と伺いました。岩手大学を進学先として選ばれたのは、こういった理由ですか？

狩野：当時はまだ全然一流の選手ではなかったんですが、スキーを競技としてやっていたので、「雪と山があるエリア」であること、野辺地にいらっしゃった大先輩のチェアスキーヤーの方から「安比高原でトレーニングをしているので、近くに来たら一緒に練習できるから岩手に来ないか？」と声をかけられたこと、そして当時の工学部に「福祉システム工学科」という福祉と工学が重なった学科があったということが岩手大学を選ぶ決め手になりました。

海妻：実際に進学してみて、岩手大学はいかがでした？

狩野：勉強の部分は正直、あまり勧められる学生ではありませんでした。1・2年生の頃はそれなりに取り組んでいましたが、3年生以降は競技に専念すること（※2年生の冬にトリノパラリンピックに出場）になったので、最低限単位取って卒業できるようにと思って勉強していました。この盛岡という場所、岩手大学という場所は、アスリートとして目覚めた地だと思っています。それまでは、なানাあだった人間が、スパンとスイッチが切り替わった場所なので、非常に思い入れのある場所です。「第二の故郷」という表現がありますが、まさにそのような感じで、ホッとする場所です。卒業してからも毎年1回は岩手大学で合宿を張っていたりと、何度も訪れている大好きな場所です。

海妻：本当に世界中を飛び回っていらっしゃいますね。世界の様々な国を見た上で、日本あるいは岩手を見て感じたことはありますか？

狩野：もう十数年間、1年の半分ぐらいは海外を飛び回るような生活していました。本当にいい人生を送らせてもらっていると思っています。十数年前は、やはり海外の方が進んでいると感じることが多かったです。意識が非常に高く、バリアフリーとかユニバーサルデザインといったことがスタンダードになっている印象がありました。しかし、ここ数年の日本の変わり方、SDGsがうたわれ、東京オリンピック・パラリンピックが開催されたといった背景があると思うんですが、改めて見ると、ハードの部分ではかなり追いついてきていると感じます。ただ、日本の良いところでもあるんですが、形式ばった形でしっかりやろうとする、そこにぎこちなさを感じるので、当たり前で根付いてる感覚が海外の方が強いかなと思います。日本はお膳立てではないですが、カッチリやろうという雰囲気を感じます。

海妻：「不十分でもいいからちょっとやってみよう」ではなくて、「何かあったらいけないから、少しでもできない部分があったら手をつけない」という意識は確かに感じます。

狩野：例えば電車に乗る場合、事前に予約して、「何時何分何の電車の何両目に乗りました。」といった連絡が飛び交うんです。それも当然ありがたいと思いますし、そのような対応を求めている方々もいらっしゃる。ただ、私個人としては、そこまで堅苦しくなく、もっと気軽に動けたらいいなと感じる部分はあります。

男女や障がいの有無にかかわらず 登用される社会を目指して

海妻：次に、現在の取り組みについてお伺いできればと思います。現在のご職業の紹介と、その中で特に力を入れている活動、特にダイバーシティ&インクルージョンに関わる部分があれば教えてくださいませんか？

柳橋：現在、滝沢市議会議員を務めており、市民のための課題解決に動いています。常に研修を重ねているにも関わらず、いざとなると「男社会そのもの」を感じます。能力ある人は男女や障がいの有無にかかわらず登用される社会にしたいと思います。

また、この春から岩手大学電気電子情報科会の会長に就任いたしました。名前の通り電気電子情報系学科の同窓会で、昭和17年に創設されて丸81年になり、会員の親睦や知識の交流等、活発な活動しております。卒業生約8000人のうち、今連絡の取れる会員は4300人強、その中で女性は1割もいないと思われます。工学系の同窓会で初の女性会長かもしれませんが、選考委員会では女性だからという議論は全くなかったようです。科会でD&Iについて特別な活動をする必要は感じませんが、各企業や地域でのD&Iの実態や今後のことなどを考える機会を作っていきたいと思えます。

狩野：私はアスリート期間中と同様に株式会社マルハンに所属しています。しかし、2022年に日本代表を退いてから活動の内容は大きく変わり、イベント出演や講演会、オリパラ教育など社会とのつながりを持った活動が多くなっています。昨年からは一般社団法人SPICE.Fを設立し、様々な活動準備を行っております。その一環として、オランダに渡って啓蒙活動を学んできましたが、その内容は「障がい者を自立させるとともに社会が持つ“障がい者像”を変えていく」というものでした。現在はオランダから持ち帰ったその活動が日本でも価値を生み出せるかという挑戦を始めており、これまでのように明確なゴール（金メダル）のない挑戦になるのかな、と実感しているところです。



海妻：岩手県は以前から女性が戦力になってきた地域で、例えば小学校の教員を中心にたくさん女性たちが活躍しています。また、無医村が多いですから、保健師を中心に地域医療を支えてきています。そういった状況で非常に不思議なのが、昔から女性が活躍しており、ポテンシャルが高いはずなのに女性議員の人数が非常に少ないことです。ポテンシャルがある女性が経験を積んで、リーダー的な存在がどんどん増えていってもおかしくないのに、なかなか増えてこない。そのために、岩手はダイバーシティが進んでいないと見られている部分があるのですが、柳橋さんは何かお感じになることはありますか？

柳橋：女性議員の数が少ないことが問題になっており、様々なところで議員のクォータ制（人数割当制）が検討されているようですが、私はその制度導入に疑問を持っています。私が務める滝沢市議会も女性議員が少し増えましたが、重要なのは数ではないと思っています。議員は誰でも良い、数を増やせば良いという訳にはいかないと思っています。こういった議論をすると必ず出てくるのが「女性の声、若者の声」なんですけど、若者のアイデアがすべて良いとも限らないし、女性の視点が常に生かされるとも限りません。これは数ではなくて、中身だと思います。女性も含めてもっともっというんなら勉強をしなければなりません。私たちの時代の女性たちは必死だったと思うんです。今の女性は、必死にならなくても生きていける時代になってきたのかな、と思う時があります。

しかし、ジェンダー平等、ダイバーシティの世の中になるには、女性自身の意識をもっともっと変えていく必要があります。

おんぶに抱っこではなく、女性たちにもっと勉強して欲しいと思うことはたくさんあります。ただ、今の学生を見てると、みんな前向きに勉強しているので、それはすごいなって思いますね。

当たり前のチャレンジや失敗を経験できる場を

海妻：現在、岩手大学では国から補助金をいただいて、女性研究者を増やすためのプロジェクトを実施しています。こういったプロジェクトで出来ることは、大同小異ありますが概ね3種類くらいに分けられます。一つ目が、介護や子育てを抱えた人が、そうでは無い人に比べてハンディを負わないようにする両立支援。二つ目は近年重要視されている業績蓄積支援。両立支援だけだと、辞めなにかもしれませんが、上を目指すところまではいけないので、もっと上を目指すモチベーションを生み出すために業績蓄積支援が必要になります。そして3つ目が「啓発」で、新たに支援制度に対して周囲の理解を深めることも必要となります。今回、この中の「業績蓄積支援」に関連する「モチベーション」の部分でお話を伺いたいのですが、モチベーションを向上させることに対してのご意見や具体的方策についてお聞かせ願います。

柳橋：私の後輩は、学歴も性別も障がいの有無も全く関係ない成果主義の会社に入社したのですが、実績が評価されリーダーにまでなりました。彼女に話を聞いたところ、「ワークライフバランスを取るためのお互いの意識、家族や周囲、会社といった全ての意識がモチベーション上がるような方向に行かないと難しい」と話していました。会社が従業員に対して適切な評価をすることで、個人の個性も引っ張り出されて、どんどんモチベーションも上がっていく。ただ、それは本人だけではなく、家庭環境・社会・会社といった周りの支えが必須です。彼女が海外に関わる業務に携わっていた時は、24時を回るような仕事をやっていましたが、「家族が支えてくれたからやって来れた。」とも話していました。やはり、ワークライフバランスを取ることが一番大事かもしれないと感じています。

私自身も様々なことをやってる時に、夫と同じように疲れて帰ってきてても、夫は寝転がるのに私が家事をやらなければならない状況もありました。うちの夫は、同世代の中では非常に理解のある方ではありますが、50年前の人ですので。ただし、今は私の方が働いているので、反対に夫が頑張ってくれています。そういった意味でも、モチベーションを上げるためには自身だけではなく、周囲の環境を含めて対策を取る必要があると思います。

海妻：大学の教員にとって重要な役割は、学生のモチベーションを上げることだと思います。

学生が目指す目標に対して、周囲がモチベーション下げることによってしまった時に、味方になって学生のモチベーションを上げることが教員の役割だと思います。狩野さんの場合には、お父様がスキーの指導員とのことで、家族からは応援いただいていたかと思うんですが、岩手大学の当時の対応はいかがでしたか？

狩野：私は、小学校・中学校・高校・大学と全て普通学校に通わせてもらったので、自分が障害者ではあるけど、自尊心を失うような機会は割と少なかったかなと思います。その当時インクルーシブとかそういうワードもあるかないかぐらいの時期だったので、岩手大学でも入学当初は「どう接していいのかわからない。」「障害者が来たけどどうやって接するんだろう？」という感じで気を使われていましたが、次第にそういったこともなくなり、相応の馬鹿もやらせてもらって、すごく楽しい学生生活を送れたと思っています。

ただ、今の時代、周囲の障害児や家族を見た時に、子供たちが得られる経験値があまりにも少なすぎると感じています。養護学校や特別支援学級等を必要としている子どもたちがいることはもちろん理解していますが、学校という日常生活で体験していく当たり前のチャレンジや失敗を経験できていないように感じます。その子供たちに対して、「社会でしっかり生きていくために頑張ろうよ。」と言ってもなかなか通じないところがあります。まずは初歩的なところから、悔しさとか嬉しさとか、そういう色々な経験を与えていくところから手がけていかないと、社会に出て「がむしゃらに」というところまで行かないと感じています。



海妻：改めて思うのが、教員が学生へ指導する場合に、自分の経験則の中でしか指導ができていないということです。もっと多様な学生を受け入れて、大学が経験値を積んでいかなきゃいけないと思います。大学がこれから様々な人を育てられるようになるためには、教員が変わることが必要ですし、教員が変われば居心地が良いからいろんな学生が増えるということだと思うんです。岩手大学で経験したことで、その後卒業された後に役立っていること、経験が生かされていると感じることは何かありますか？

狩野：私は人付き合いという部分だと思っています。大学と高校で人間関係は大きく変わりました。私は、岩手大学在籍中にはスキー部に所属していて、健常者と一緒にスキー部で活動していました。

岩手大学と弘前大学、青森大学の東北3校のスキー部が集まって、雪山で合同合宿をしたこともあり、また、学部間・学科間での交流や、岩手県立大学をはじめとして岩手県内・盛岡市内の学校との交流もありました。これまでは閉鎖的な中でしかなかった人間関係が大きく広がったこと、それを自分のスタンダードにできたのは今もかなり大きな財産かなと思います。

柳橋：私自身、高校も大学も男子が多数を占める環境にいたこともあり、人に対してあまり差別感を持たないで育ってきました。そのため、女性が多数を占める会に行こうと、議会に行こうと、色んな周りの人を見ても、自分はそういう目で見ることはありません。上だとか、下だとかといったことは感じません。ただし、勉強してきた人と、してこなかった人の違いはよく分かりますけどね。

狩野：私が岩手大学に大変感謝していることは、その当時、「うちの施設では車いすユーザーの対応はできない。」と言われ、車いすユーザーの入学を断る大学が往々にしてある時代でした。その時代において、実際に入学が認められた経緯はわかりませんが、結果として岩手大学は私を受け入れてくれました。私が入学してからも、教室やトイレの扉が全部自動ドアになりましたし、長期休みの度にどんどん施設が変わってくるのを目の当たりにして、あの時代にそこまで対応してくれたことを非常に感謝しています。私は、開き戸でも問題なく生活はできるのですが、そこまでしてくれるんだと感じていました。

お金はなくても頭を使って

海妻：最近ハードを整備したくても、財源的に難しいという問題があります。そこで、ダイバーシティの実現のために必要となるコストことでお伺いしたいと思います。

狩野：障がいに関しては、お金もかかるし、やっぱり全部を網羅することは非常に難しいと思いますので、そこは工夫が必要かなと思います。少し話題がずれてしまうかもしれませんが、私は当事者側も変わっていかなくちゃいけないと思っています。甘えすぎることではなく、自分でできる部分と、支援してもらおう部分がそれぞれ歩み寄ることで共生社会が生まれるのかな、と思っています。

柳橋：お金がないと言われた場合には、「だったら頭使ってください。そしたらいろんなアイデアが出て、多分優先順位を考えればできないこともないと思います。」と答えています。工夫の仕方では出来ないことはないですし、物事には優先順位もあります。決まったお金しかないのであれば、後は使い方ですね。知恵と当事者同士の話し合いしかないと思っています。子育てにももちろんお金を出すんですけど、それ以上にインフラのことなど様々な問題がありますので。例えば、100人で知恵を出し合えば、使えるアイデアは必ずあると思っています。

海妻：ダイバーシティの事は、「思いやりを持つ」というような表面的でイベント的に



捉えられがちです。そうでは無く、本気でインクルーズしていくこと、口先だけで終わらせないように資金面を含めてしっかり検討していく必要があると思います。先ほど、ここ数年の間で急激に変わってきたという話もありましたが、表面的な部分になっていないか気がかりです。

柳橋：それは確かに感じるころはあります。一過性だったら困るな、と。

狩野：ここ最近、「マイノリティ」とか「マジョリティ」とか「ダイバーシティ」といったワードばかりが目立っている印象があります。本来は、そういったワードすら無くなるのが「共生社会」なのかなと思います。その言葉が、そもそもそういう概念で見ている、分けて考えていることになると思います。私は、マイノリティと呼ばれる人たちを見ても何とも思わないどころか、むしろ刺激をもらえる、面白い、自分にとって豊かになる存在として見ています。私がマイノリティ側の人間だからそう見えているかもしれませんが、全員がそう見えてたらきっといい社会になるんだろうなと思います。

柳橋：そういう枠組みの無い世界になるのが一番理想だと思います。しかし、そこまで行くにはまだまだ時間がかかりそうですね。私が関わってから50年になりますが、当初は国が「男女共同参画」を掲げ、途中で「ジェンダー」と言い始め、それがいつの間にか「ダイバーシティ」になって...、またその二の舞にならないか心配です。しっかり根付いて、枠組みがなくなるような時代になるには、資金が絶対必要になるので、国が社会全体に対してキッチリとやってくれたら良いなと思っています。現状をみると50年かけてもこんなものか、と思う時もありますが、世の中は本当に変わってきています。私の在学中、学内保育所は本当に理想でした。現在は実現していると聞き、「やってる、嬉しい」とは思うんですけど、これを根付かせるためにはいろんな苦労がありますね。

海妻：学内保育所については、外的要因であったり、資金の部分で非常に苦労しています。しかし、外国人研究者からは、公的な保育所では対応できない英語対応や、宗教上の理由の給食にまで対応していることから非常に喜ばれています。岩手大学に保育所が存在する意味はあると思っていますので、引き続き経営努力に努めたいと思っています。

岩手大学の卒業生などとは現在でも関わりはありますか？

柳橋：私は電気電子情報科会の会長という立場上、年に何度も同窓生に会っています。東京に行っても会いますし、岩手に戻ってくれば訪ねて来ます。先輩から後輩まで繋がり強いかもしれません。

狩野：現役選手だった頃は、岩手日報東京支部会のような集まりに呼んでいただいたり、講演会で講話させてもらった時に同窓生からお声がけいただいていたと思います。今は、北海道の安平町という町に移り住むことを検討しているのですが、そこで岩手大学出身の方がトレーニングジムを開いてると伺いました。まだお会いできていないのですが、最寄りのトレーニングジムはそこになりますので、楽しみにしています。声をかけていただける機会は多かったですが、そこから深く連携を取るところまでは出来ていませんでした。

海妻：本学で最初の女性助教授になられた鷹嘴テルさんという方で、栄養学を専門として、県内各地の栄養調査や、子供の栄養指導等をなさった方がおりました。その功績から、女性大学院生表彰を通称「鷹嘴テル賞」として表彰しています。実は、2021年度に通称として使うまでは、学内で功績等の検証は全くされておませんでした。今年度は、横田チエさんの展示を行う予定ですが、これは先輩方が残した素晴らしい功績を振り返ることで、たくさんの勇気もらえるという考えで実施しています。今後も、これまでの岩手大学の様々な蓄積を振り返ることで、先輩たちと今の私たちをつないでいきたいと思っています。

また、地理的な横のつながりもあります。1キャンパスに4学部があることで、多様な人たちが在学中に関われることが岩大の強みというお話もありました。地理的に散らばった中でも、岩手大学を軸に繋がれる関係を構築すること、その中で多様な人に接することで、私たちの多様性の強みを強めていくことが出来ると思います。

柳橋：鷹嘴テル先生には、地元の女性団体でお呼びして講演いただいたこともあります。私自身、鷹嘴テル先生の長男と同期という縁もあり、直接お話したこともあります。非常に尊敬していた先輩です。また、工学部ですと、草刈先生が私たちの最初の先生でした。草刈先生が最後に講義したとき、私はまだ一般教養でしたが、私たちの代が最後に講義を受けた代でした。その後、電気電子情報科会で「草刈賞」を創設し、学修だけではなく、様々な学生活動をした学生を選んで理工学部長から贈呈していただいております。そういう面で、大先輩からの繋がりをずっと続けていけたらいいなと思っています。

「経験こそ最大の財産」 「視野を広げて社会へ」

海妻：それでは、最後になりますが、岩手大学もしくは在學生へ向けて一言メッセージをいただければと思います

狩野：私は自身の怪我から多くを学び、長年パラリンピックという舞台上で戦ってきました。そこで一番感じたことは、『経験こそ最大の財産』であるということです。私が歩んできた道は、他の誰にも経験できない貴重なものだと思います。しかし、これはすべての方に当てはまることで、それぞれの経験や感情は一人ひとりにとって貴重な財産です。だからこそ、学生の皆さんにはたくさんの方に目を向け、多くの経験を積んでほしいと思います。たとえ、その先に成功や大きな成果がなかったとしても決して無駄ではなく、その時のあなたは必ず成長していると思います。そうしていくうちに、きっと人生は拓けてくるはずですよ。岩手大学で多くのことを学び、たくさんの経験を通じて、豊かな人生に繋げていくことを心から願っています！

柳橋：この度、こういう機会を作っていただきありがとうございます。同窓会活動にかかわっているおかげで、大学の様子や企業の事など常に新情報をいただけています。正直ついていけないこともあります。社会の意識は50年前と変わっていないと感じることもありますが、大学は本当に進んでいると思います。学生たちには恵まれた環境を活かしてしっかりと勉強してほしい、コロナの規制もなくなったのですから、コミュニケーションをとって思いっきり学生生活を楽しんでほしいです。いろんな人と交って視野を広げて社会に出てほしいと思います。願わくば、卒業したら先輩と交流しスキルアップのためにも同窓会にも顔を出してもらえればとおもいます。

海妻：本日は貴重なお話をありがとうございました。



(2024年8月7日(水)、岩手大学上田キャンパスにて収録)